

原著・實驗

未產婦人ニ發スル佝僂病骨軟化病ノ移行型

第一章 移行型ノ存在
在佐渡佝僂病療養所 菊 川 直

佝僂病ト骨軟化病トハ臨床上及病理解剖上ニ於テ全然區別ス可キ、各獨立ノ疾患トシテ記載サレタリ、今成書記載ノ主徴ヲ掲ゲテ以テ其區別點ヲ摘録セバ

臨 床 上

佝 僂 病

- 一、前驅症アリ例ヘバ生後虛弱ナルモノ消化障害寒胃ニ罹リ易ク發汗多キ等

- 一、年齡ハ五六歳以下ノ小兒ヲ犯カシテ兩方相半バシ
- 一、疼痛殆ド之ナシ

- 一、罹患骨格部分ハ頭蓋顔面胸骨肋骨脊椎四肢骨ニシテ重症ハ骨盤ヲ

骨軟化病

- 一、前驅症ハ先ツ疼痛ヲ以テ始ル

- 一、春機發動期及其後ニ至テ婦人特ニ妊娠分娩產褥等ニ關連シテ發生ス
- 一、疼痛ハ必發ノ徴候ニシテ且特異性ナリ

- 一、先ヅ骨盤骨ヲ犯シテ漸ク他ノ骨格部分ニ及ブ

骨 犯 カ ス

- 一、骨盤ノ變化ハ單純扁平骨盤ニシテ所謂佝僂病性骨盤ヲ形成ス

- 一、經過ハ比較的短クシテ豫後良ナリ

病 理 解 剖 上

- 一、石灰ニ乏シキ類骨組織ノ新生附加ヲ以テ主徴トナス

- 一、已成骨々質ノ石灰溶解吸收(脱却)機構ヲ主徴トナス

之ニ由リ是ヲ觀ルニ佝僂病ト骨軟化病トハ自ラ嚴正ニ區別シ得可シ、歐洲ニ於テハ佝僂病及骨軟化病ハ多クハ區劃性ニ或ハ散在性ニ發生セリト、故ニ各個ノ研究ニ精シキモノアルモ兩病相互關連的ノ調査研究ヲ爲シ得ルノ機會至テ多カラザリシニヨルナル可シ、本邦ニ於テ西洋醫學ノ輸入後久シク依然トシテ完ク佝僂病及骨軟化病之ナシトサレタルモ、明治二十一年頃佝僂病ノ存在ヲ報告セルモノアリテヨリ、爾來各方面ニ於テ其發生存在ヲ報告シ彼ノ絶無說ヲ排シテ佝僂病ノ存在ヲ確認スルニ至レリ、而シテ明治三十九年富山縣氷見郡地方ニ聳然地方病性ニ多發シ居ルヲ發見セルト同時ニ、佝僂病發生部落ニハ復骨軟化病患者ヲモ混在シ居ルコトヲ發見セリ、

之本邦ニ於テモ骨軟化病患者存在報告ノ始メトス、明治四十二年新潟縣佐渡郡ニ於テモ佝僂病ノ地方病性發生ト、其發生部落ニハ骨軟化病患者ヲモ發生混在シ居ルヲ認メタリ（佐渡郡病ハ三十九年東京唐澤博士ノ上京セル佐渡郡一患者ヲ佝僂病ト診定セシヨリ其存在ヲ報告スルモノ續出セリ）茲ニ於テカ本邦ハ絶無ノ境遇ヨリ一躍地方病性發生存在ヲ認ムルノ位置ニ達セリ。

斯ノ如ク相續ギテ發見サレタル多發狀況ニヨリ西洋ノ散在性ニ比シ其發生狀態ヲ極メテ緻密ノ點マデ調査研究スルノ大ナル好機會ヲ得、從テ兩病ノ原因本態等ニ就キ諸々調査ノ結果ヲ發表シ殊ニ本態ニ關シテハ兩病同一ナラントノ說有力ナルニ至レリ、歐洲ニ於テハ兩病本態同一說ヲ唱フルモノナキニアラザルモ別種說尙有力ナリ、我が邦ニ於テ佝僂病骨軟化病ヲ同一ナリトシ一元論ヲ主張スルニ至リタルハ、臨床上之マデ舉ゲテ區別點ト爲サレシ事項モ根據薄弱ニシテ兩病ヲ別種トナスノ力少ク、反テ互ニ相關連セシメ殊ニ骨軟化病患者中西洋ニ於テ少シト云ハレタル非產褥性骨軟化症ノ多ク、且此種骨軟化病患者中純然タル骨軟化病ヨリモ骨軟化症主徴ノ患者ニシテ佝僂病型ヲ具有シ、或ハ佝僂病型主徴患者ニシテ骨軟化症狀ヲモ兼備スルモノ多シ、乃未產婦人ニ於テ單純骨軟化病患者ヨリモ、佝僂病型ト骨軟化病型トヲ兼備スルモノ却テ多キヲ知レリ、前年富山縣ニ於ケル調査時已ニ兩病型兼備ノ所謂移型アルコト報告セラレ、四十五年木下博士ノ佐渡郡ニ於ケル調査ノ結果（全部ノ調査ニアラズ）ハ、骨軟化病患者十四名中五名ハ妊娠性骨軟化病患者ニシテ九名ハ非產褥性

ノモノナリキ、而テ十四名ノ骨軟化病患者ヲ左ノ如ク分類セリ。

骨軟化 一四 妊娠性骨軟化病五 佝僂病經過セルモノノ
病者 非妊娠性骨軟化病九 佝僂病經過セルモノノ
其後予等ノ調査ノ結果ヲ記セバ（四十五年—大正三年）

骨軟化 二六 妊娠性骨軟化病八 佝僂病經過セルモノノ
病者 非妊娠性骨軟化病一八 佝僂病經過セルモノノ
一八〇
二六

故ニ非妊娠性骨軟化病ハ妊娠性ノモノヨリモ其數多ク、而テ非妊娠性ノモノノ中佝僂病ヲ經過セル形跡アルモノハ無キモノヨリモ甚ダ多キヲ認メラル。

大阪緒方博士（正清）ハ三十九年富山縣氷見郡ニ於テ調査シ佝僂病型ヲ兼備セル骨軟化病患者ヲ發見シ、且之等ノ多クハ未產婦人ニ發セル非產褥性ノモノナリシヲ報告セラレタリ。

此兩病型ヲ兼備セルモノハ一ハ佝僂病ノ一旦停止シテ治癒ノ狀ニアルモノガ春機發動期及其後ニ至リテ骨軟化病ニ罹リタルモノ、或ハ進行性佝僂病ノ明確ナル限界ナクシテ遂ニ骨軟化病ヲモ兼發シタリトモ云フヲ得可ク、一ハ停止セル病ガ春機發動期ニ及デ再發シ、又ハ進行性佝僂病ノ其期ニ及ビ更ニ増悪セルモノナリトモ云フヲ得可シ、故ニ前說ノ如ンバ直接兩病ハ相互關連セル親密ナル疾患ト云フ可ク、後說ノ如ンバ其ニ罹患セル患者ノ病變ハ骨軟化病ノ病變ト相酷似シテ殆ド區別ニ苦ムモノナリト云フ可シ。

何レニシテモ兩病型兼備ノモノ乃移行型ハ佝僂病及骨軟化病トヲ相接近終ニ連絡セシメ、兩病ヲシテ等一ナラシムルニ甚ダ有力ナル興味アル病型ナルヲ以テ其臨床的觀察ヲ少シク詳述セントス。

第二章 臨床的觀察

一、性及年齡ノ關係

本項ニ於テハ便宜上佝僂病及骨軟化病患者ノ年齡及性ノ關係ヲ述べ、次ニ移行型ノ夫レニ及ボサン自己調査ノ結果ハ左ノ如シ。

甲表、患者現在年齡及性別

年齡	男	女	計
1	2	1	3
2	3	2	5
3	4	2	6
4	5	2	7
5	6	4	10
6	7	3	10
7	8	2	10
8	9	2	11
9	10	2	12
10	11	2	13
11	12	1	13
12	13	1	14
13	14	3	17
14	15	2	16
15	16	2	18
16	17	1	18
17	18	3	21
18	19	2	21
19	20	2	22
20	21	2	23
21	22	1	24
22	23	1	25
23	24	1	26—30
24	25	3	31—35
25	26—30	5	36—40
26—30	31—35	1	41—50
31—35	36—40	1	51—60
36—40	41—50		
41—50	51—60		
51—60			
68	60	8	

乙表、患者發病年齡ト其性別

年齡	男	女	計
1	1	1	2
2	1	1	2
3	1	1	2
4	1	1	2
5	1	1	2
6	1	1	2
7	1	1	2
8	1	1	2
9	1	1	2
10	1	1	2
11	1	1	2
12	1	1	2
13	1	1	2
14	1	1	2
15	1	1	2
16	1	1	2
17	1	1	2
18	1	1	2
19	1	1	2
20	1	1	2
21	1	1	2
22	1	1	2
23	1	1	2
24	1	1	2
25	1	1	2
26—30	1	1	2
31—35	1	1	2
36—40	1	1	2
41—50	1	1	2
51—60	1	1	2
68	68	60	8

原著・實驗

前表甲ニヨレバ現在畸型病患者數ハ生後初年ヨリ二十四歲頃マデハ各年齡ニ於テ殆ド發生シ居ラザルナク、二十六歲ヨリ四十歲間ハ少數ナガラ順次病者ヲ出シ、老傾ノ五十年代ノ婦人ニハ患者一名ヲ見タルノミ、之多クハ骨軟化病患者ハ經過永キモノナルモ、實際シカク老セザルニ衰弱又ハ餘病ノ爲メニ死亡ノ轉歸ヲ取ルヲ以テナリ、而テ性別ハ小兒ハ男女ニ成人ハ婦人ニノミ偏ス。

乙表ニヨレバ其發病年齡ニ關シテハ一乃至二歲ニ尤モ多發シ(二)三乃至四歲(八)五乃至六歲(四)ノ發病割合ニシテ、而テ七八歲頃ニ發病セルモノ(一一)九乃至十一歲(九)ニシテ、十三乃至十六歲間乃春機發動期頃ニ發病セルモノ又九名アリ、而テ此春機發動期ニ發病セルモノハ多クハ佝僂病及骨軟化病ノ兩病型ヲ兼有シ、此年齡期ヨリ後ハ發病者ナク、二十一歲發病(二)三十一歲乃至三十五歲ニ發病セルモノ(六)ニシテ皆悉ク骨軟化病型ヲ有スルモノノミニシテ佝僂病經過ノ形跡ヲ認メズ。

上表ヲ通覽シテ之ヲ泰西ノ本病發生ノ年齡期ト及其數性トニ比較スルニ、歐洲ニ於ケル佝僂病發病期ト見做サレタル一乃至六歲間ニハ三三名(四八・五二%)ヲ發生シ、七八歲頃ヨリ十歲頃マデノ間所謂晩期佝僂病(歐洲ニ於テハ稀ナリト云)トモ稱スベキ時ニ發病セルモノ二〇名(二九・一〇%)ヲ算セリ、而シテ今以上ノ調査數ヨリ現在骨軟化病型ヲ有スルモノヲ撰ブニ其數二六名(三八・二三%)ヲ算ス、之ヲ又妊娠分娩產褥等ニ關スルモノト否ラザルモノトニ區別ス、乃產褥性ト非產褥

ザルモ皮膚薄弱貧血狀ニシテ弛緩シ營養ハ殆ト悉皆不良ナリ、小兒ノ五六歲頃ニ發病スルモノハ歩行時多クハ下肢殊ニ膝關節又ハ足跗關節部ノ疼痛ヲ訴ヘ歩行ヲ嫌フニ至ル、發語シ得ザル時期ノ小兒ハ患部ヲ中等度ニ壓シ號叫スルモノアリ、乃疼痛ヲ感ズルモノナル可シ、春機發動期ニ發病スルモノハ皆腰部膝關節股關節部等ノ疼痛ヲ訴ヘ漸次進行シテ終ニ劇痛トナリ患者ヲ惱マシ病床ニ呻吟セシムルニ至ル、予ノ調査セル十六名中消化障害寒冒等ニ罹リ易キ傾向アリシモノ發汗ノ多キ等ノ前徵アリシモノ二例アリ他ハ不明又ハナカリシモノナリキ、然レドモ、微痛ヲ以テ前驅セシメ歩行時ノ疼痛有無ハ之ヲ記憶スルモノ多ク殆ト皆例ニ於テ其有痛ナリシヲ知リ得タリ。(以下續出)

ポロー氏手術ノ一例

平壤慈惠醫院 池田 寧 述

ポロー氏手術ハボストン市ノ醫師ストレル氏ガ一八六九年初メテ三十七歲ノ初産婦ニ行ヒシニ始マルモノニシテ、該患者ハ小骨盤ノ左後方ニ大人頭大ノ癒着性腫瘍アリ。妊娠末期ニ至リ破水スルモ分娩セズ。依リテ破水後第三日ニ至リ開腹術ヲ行ヒ次テ子宮ヲ切開シハ「ボンド」ノ浸軟胎兒ヲ娩出セシメシニ、不幸子宮收縮不良ニシテ出血甚ダシキ爲メ直チニ子宮ヲ頸部ヨリ摘出シ次テ該腫瘍ヲ剝離摘出セリ。此ニ要セシ手術時間ハ三時間ニシテ手術後六十六時間ニシテ敗血症ノ爲ニ斃レタリ。故ニ之レガ爲メ一時該手術ヲ行フモノナカリ

原著・實驗

シガ越ヘテポロー氏 八七六年五月二十一日二十五歲ノ妊娠婦ユリア、カバリニト稱スルモノ、強度ノ骨軟化症ノ爲メ眞結合線僅カニ四仙迷ナルヲ以テ已ニ陣痛發起シ分娩開始セシモ自然分娩不可能ナルヲ以テ早速手術ニ着手シ開腹術ヲ行ヒ、子宮ヲ切開シ胎兒ヲ娩出セシメタリ。之レニ要セシ手術時間ハ四十三分間ニシテ手術後一ヶ月半ニシテ全治退院セリ。之ニヨリテ世ニ紹介セラレシヲ以テ本手術ヲポロー氏手術ト云フニ至レリ。而シテ本手術ノ成績ハ該手術發表以來二十五年間ニ於ケル全歐米ニ於ケル手術總數一〇九七八ノ中母體ノ死亡數ハ二四・八%ニシテ胎兒死亡數ハ三〇%假死ヨリ蘇生セシモノ三〇ナリ。然レドモ今日醫學ノ進歩ト共ニ其ノ成績ハ極メテ良好トナリシモノト確信ス。

本患者ハ平壤府黃金町ニ住スル二十三歲ノ初産婦ニシテ生來健全ナリシガ、四歲ノ時誤リテ六尺位ノ高所ヨリ墮落セシモ、其ノ當時ハ何等異常ヲ認メザリシガ越ヘテ六歲ノ春右股關節部ニ疼痛、腫脹ヲ來タシ醫治ヲ受ケシモ其ノ効ナク、股關節ハ約六十度ノ位置ニ固定セラレ跛行今日ニ至レリト。初經ハ十七歲ノ三月來潮シ爾來正調二十一歲ノ七月結婚ス。夫ハ極メテ健全ナリト。而シテ終經ハ大正二年二月十四日ヨリ三日間常ノ如ク來潮シ其ノ後ニ三ヶ月ヲ經テ輕度ノ吐氣アリシモ敢テ醫治ヲ求ムルコトナク十數日ニシテ輕快セリト。其ノ後全身ニ異常ナク漸次腹部膨大シ七月初旬初メテ胎動ヲ感ゼシニヨリ妊娠ナリト想像セシモ其ノ當時不幸地方ニアリシタメ助産婦併ニ醫師ニ診ヲ乞フ能ハズ其ノマ、全身ニ異常ナ